

メタルドゥー レアメタルリサイクラー**加工に強い1st物流拠点を1年半ぶりに再開**

レアメタルのリサイクラー大手のメタルドゥー(藤田國廣社長)は、9月1日から大阪市此花区の「1st物流センター」を再開する。同社は09年3月に敷地面積の広い2nd物流センター(神戸市中央区)を立ち上げたことから、1stセンターは加工を除く荷受・仕分け・出荷といった通常作業をとめ、2ndセンターに業務を集約してきた。だが、リーマンショック以降に1年ほど低迷してきた取扱量は、ここに来てピークとなってきた08年上半期の9割超まで回復しており、処理量の拡大が急務となってきた。環境経営が重視される中、発生元はスクラップの適正処理や再資源を求め、需要家は鉱石や地金などプライマリーにかわる2次原料の使用比率拡大を進めており、同社は発生元・需要家の幅広いニーズに対応する体制を整える。

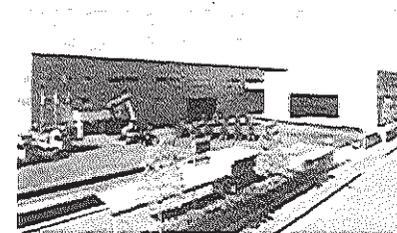
発生元は環境対応、需要家は2次原料の活用拡大を望む。メタルドゥーは1stセンターの再開によって、数量・品種の拡大、安定的な荷受・供給といった発生元と需要家の要望に対応できる体制を整える。発生元との契約があるため、同社は自ら有害物質の適正処理を行っているが、資源抽出といった加工の8割は現在外部企業に発注している。今後は対応可能な品種、形状を増やし、内製比率を高めていく考え。

一方、需要家は主に、電炉などを抱える装置産業であるため、鉱石や地金以外のスクラップを2次原料として活用するニーズが高い。取扱数量の拡大による安定供給だけでなく、「需要家の直接原料にする」との方針から仕分けや加工による品質向上も進める。

1stセンターで保税蔵置所や危険物倉庫を運用

05年7月に稼動した1st物流センター(大阪市此花区常吉1丁目1番76号)は、敷地面積で2ndセンターより狭いものの、構内の面積が広く、処理や加工を行う機械類も多い。2ndセンターは現在4班20名体制で稼動しているが、このうち1班5名を1stセンターに移動させ、いずれ2班10名体制に入る。取扱う商品でも、7種のうちチタン系、バッテリー系、タンタル系などの3種を1stセンターに移管する。セカンダリー(ドップ・エンド材や端切れなどの2級品)のほか、パウダーやスラッシュといった形状を扱う。

同社は6月1日から保税蔵置場を設置した。保税は、税関から外国貨物の輸入許可を受けずに、外国貨物や輸出許可品として輸入関税がかからない。民間企業が許可を受け設置する保税蔵置場は、一般的に中継貿易などに使用されるが、メタルドゥーは日系メーカーの海外工場や日本国内の保税工場から発生するスクラップを保税蔵置場に集め、保税対象のまま仕分け・加工し海外へ出荷できる。危険物倉庫(可燃性の液体類・固体類を保管する)の運用も08年2月末から行ってきた。第2類で最大5tの取扱いが可能で、消防法では、マグネシウム、鉄粉、金属粉などが第2類の危険物に指定される。



メタルドゥーの1st物流センター

インジウム建値 8月は6.0~6.5万円/kgと据置き

DOWA エレクトロニクスは、8月2日出荷分以降のインジウム生産者建値(99.99%, kg当り)を大口60,000円、小口65,000円と、7月から据置いた。